

ミュージアム県 ながさき

vol.
5
2016年 春号
History and Culture
of Nagasaki

【特集1】

祝・日本遺産認定！
国境の島 壱岐・対馬・五島
～古代からの架け橋～

【特集2】

「隠元さん」と長崎

逸品紹介
自慢の体験プログラム
ミュージアムの人々
建物探訪
ながさき歴史・文化トピックス



平成28年度 企画展等のご案内 *会期や内容は変更になることがあります。



長崎歴史文化博物館



篠山紀信展 写真力
H28年4月9日(土)～5月29日(日)

エヴァンゲリオン展
7月2日(土)～9月4日(日)

特別公開
「新発見! 天正遣欧少年使節
伊東マンショの肖像」
7月22日(金)～8月31日(水)
会場: 2F 常設展示室(予定)

くんち三八二年展
9月17日(土)～10月16日(日)

アールヌーヴォーの装飾磁器展
10月29日(土)～12月4日(日)

特別展覧会
「没後150年 坂本龍馬」
12月17日(土)～H29年2月5日(日)

シーボルトの見せたかった日本展
2月18日(土)～4月2日(日)

〒850-0007 長崎市立山1丁目1番1号
TEL 095-818-8366
<http://www.nmhc.jp/>



長崎県美術館



ミュシャ展
アール・ヌーヴォーの華
H28年4月2日(土)～5月29日(日)

新宮晋の宇宙船
6月4日(土)～7月10日(日)

スタジオ設立30周年記念
ピクサー展
7月27日(水)～9月8日(木)

特別展 **古代ギリシャ** - 時空を超えた旅 -
10月14日(金)～12月11日(日)

デンマーク・デザイン(仮称)
12月23日(金・祝)～H29年2月12日(日)

夢の美術館
めぐりあう名画たち(仮称)
2月23日(木)～4月2日(日)

アートたけし展
3月10日(金)～4月16日(日)
会場: 県民ギャラリー

〒850-0862 長崎市出島町2-1
TEL 095-833-2110
<http://www.nagasaki-museum.jp/>



壱岐市立一支国博物館



平戸松浦家と対馬宗家の家宝展
～なぜ壱岐は長崎県なのか～
H28年4月15日(金)～6月19日(日)

夏季企画展(予定)
7月15日(金)～9月4日(日)

しまごと芸術祭2016
10月7日(金)～11月27日(日)

北斎展
12月16日(金)～H29年1月29日(日)



〒811-5322 壱岐市芦辺町深江鶴亀触515-1
TEL 0920-45-2731
<http://www.iki-haku.jp/>

長崎県 歴史・文化ポータルサイト

ながさき歴史・文化 ネット

長崎県内のミュージアム(美術館、博物館、動植物園、水族館など)・文化ホールを施設分類やエリア、分野で検索する事ができ、各施設の基本情報のほか、展覧会や講演会などのイベント情報も見ることが出来ます。県内ミュージアムの見学やイベントをお調べの際にご活用ください。あわせて、各施設の専門家などによるコラム(月に1度更新)や、本情報誌など読み物もたくさん掲出しています。

<http://nagasaki-bunkanet.jp/>



長崎県内のミュージアム・文化ホールと各施設のイベント情報をご紹介します

無料アプリ ながさきミュージアム

長崎県文化振興課の公式アプリケーション。長崎県内のミュージアムや文化施設を完全網羅し、開催中のイベント情報や施設情報を確認できます。また、最旬のイベント情報をプッシュ通知でお知らせします。

App StoreまたはGoogle playで [ながミュー](#) [検索](#)



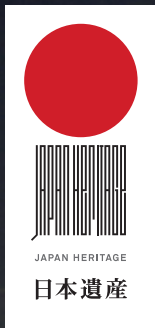
長崎市旧香港上海銀行長崎支店記念館
長崎近代交流史と孫文・梅屋庄吉ミュージアム



一切ロ外シテハナラズ。
国境を越えた厚い友情。

〒850-0921 長崎市松が枝4-46
TEL: 095-827-8746

<http://www.nmhc.jp/museum/index.htm>



【特集1】 祝・日本遺産認定！ 国境の島 壱岐・対馬・五島 ～古代からの架け橋～ 壱岐市・対馬市・五島市・新上五島町

日本は大小6,852の島から成り、長崎県には日本最多の971の島々があります。
九州と朝鮮半島との間に飛び石のように浮かぶ壱岐と対馬、大陸との間の東シナ海に鎖状に浮かぶ五島列島は、いにしえより、日本と大陸を結ぶ「海の道」の要衝であり、大陸との交流のインターフェースでもありました。
特に朝鮮半島との関わりは深く、壱岐は弥生時代に海上交易で王都を築き、対馬は中世以降に朝鮮との貿易と外交実務を独占し、中継貿易の拠点や迎賓地として栄えました。その後、中継地としての役割は希薄になりましたが、今もなお、古代住居跡や城跡、庭園等が当時の興隆を語り続け、また焼酎や麺類等の特産品、民俗行事等に交流の痕跡をうかがうことができます。
「日本遺産 (Japan Heritage)」とは、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語る「ストーリー」を文化庁が認定するものです。初年度の平成27年度には、国境の島ならではの融和と衝突を繰り返しながらも、連綿と交流を続ける、壱岐・対馬・五島の「国境の島 壱岐・対馬・五島 ～古代からの架け橋～」が、国内各地のストーリーとともに第1号として認定されました(全18件)。



究める・つなげる「長崎の歴史」魅力発信事業
ミュージアム県ながさき vol.5
2016年(平成28)3月発行
企画・執筆・発行・長崎県文化観光国際部文化振興課
デザイン・デザインスタジオ ヨンエフ
本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載および
複写を禁じます。

長崎県には、歴史、民俗、美術、自然科学、産業などをテーマとした特色あるミュージアムが各地に数多くあります(H27年3月1日現在168施設)。本県では、平成22年度より、これらのミュージアムを地域の大切な資源として、より魅力ある地域づくりの「てこ」とするため、各施設の活性化と施設間の連携を進めていく事業を推進しています。
本情報誌は、この事業の一環として、県内所在のミュージアム各館の魅力と取り組みを、さまざまな角度から、皆様に広くご紹介するもので、平成25年2月に創刊し、本5号からは、ミュージアムを取り巻く長崎県の歴史や文化もあわせてご紹介することになりました。本情報誌を、各施設の基本情報などを掲載するポータルサイト「ながさき歴史・文化ネット」(<http://nagasaki-bunkanet.jp>)とあわせて、県民の皆様をはじめ、県外から観光等でお越しになれる皆様に気軽にご利用いただけましたら幸いです。
平成28年3月 長崎県文化観光国際部文化振興課

vol.5	
2016年 春号 Contents	
1	【特集1】祝・日本遺産認定！国境の島 壱岐・対馬・五島 ～古代からの架け橋～
10	【特集2】「隠元さん」と長崎―長崎に根付いた黄檗文化 幸福な日中文化交流のかたち
11	・興福寺 松尾法道住職に聞く「隠元禅師のふるさと訪問の旅を終えて」
	・長崎・唐寺めぐり
13	・越中哲也氏に聞く「今に根付く長崎の中国文化」
14	・寄稿『「唐絵」と呼ばれた絵画」 長崎歴史文化博物館研究員 白木菜保子
15	逸品紹介 大村市立史料館
16	自慢の体験プログラム 雲仙災害記念館がまだすドーム
17	ミュージアムの人々① 平戸城 施設長・学芸員 浦部知之氏
18	ミュージアムの人々② みのつる資料館 館長 下田泰義氏
19	建物探訪 日本二十六聖人記念館
20	ながさき歴史・文化トピックス
写真表紙・本頁：原の辻遺跡(壱岐市提供)	

【原稿執筆】
*寄稿として文中にお名前を記させていただいている方以外の執筆者は下記のとおりです。
◎「特集 日本遺産」 対馬市の文化財、トピックス「対馬の古墳と出土品」・「福江島に見る遣唐使の足跡と三井楽」・「中世の交易の痕跡をみる」：本馬貞夫(長崎県長崎学アドバイザー)／壱岐市の文化財・関連施設：松見裕二(壱岐市教育委員会文化財課係長)／その他：県文化振興課
◎「特集『隠元さん』と長崎」 越中哲也氏、松尾法道氏インタビュー：斎藤義朗(県文化振興課主任学芸員)／その他：伊藤晴子(同課係長(学芸員))
◎「ミュージアムの人々①」：小松旭(同課主事)／「同②」・「自慢の体験プログラム」・「建物探訪」：斎藤／「歴史・文化トピックス」：小松、伊東猛(同課係長)、伊藤
【画像提供】本文中に記載の画像提供者のほかは下記のとおりです。
④壱岐市・壱岐市教育委員会、⑤対馬市・対馬市教育委員会、⑥五島市・五島市教育委員会、⑦新上五島町・新上五島町教育委員会、⑧およびP.16～19 長崎県、⑨長崎歴史文化博物館、⑩長崎県観光連盟、⑪長崎県立対馬歴史民俗資料館、⑫大村市立史料館、⑬壱岐市立一支国博物館、⑭長崎県美術館、⑮対馬観光物産協会

日本がまだ「倭」の国とよばれていた時代、中国の使節は、朝鮮半島から南下し、海上の対馬や壱岐を経由して、倭の国の女王がいる邪馬台国を目指しました。対馬や壱岐を旅した中国の使節の足跡を辿れば、今もなお、三世紀（日本の弥生時代末期）の中国の正史『三国志』中の「魏志」倭人伝に記されたとおりの風景をとどめています。

都より倭に至るには、海岸に循（したが）って水行し、韓国を歴（へ）て、乍（さ）は南し、乍（さ）は東し、その北岸狗（く）邪（や）韓国に到る七十余里。始めて一海を度（た）る十余里、対馬国に至る。その大官を卑狗（ひこ）といい、副を卑奴母（ひなぼ）離（は）れという。

居る所絶島、方四百余里ばかり。土地は山陰しく、深林多く、道路は禽鹿の径の如し。十余戸あり。良田なく、海物を食して自活し、船に乗りて南北に市（し）糴（せき）す。また南一海を渡る十余里、名づけて濔（せ）海（* 玄界灘という。一大国（* 一支国「壱岐」）に至る。官をまた卑狗（ひこ）といい、副を卑奴母離（ひなぼは）れという。方三百里ばかり。竹木・叢林多く、三千ばかりの家あり。やや田地あり、田を耕せどもなお食するに足らず、また南北に市糴（せきせき）す。

「魏志倭人伝」（『三国志』第30巻東夷伝・倭人）
（岩波文庫『新訂魏志倭人伝 後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝 / 中国正史日本伝 1』岩波書店より）

「一支国」の「原の辻」は、海上交易で王都を築いた国際交流都市の先駆けでした。倭の国のどこよりも早く海外の情報をキャッチできた原の辻には、日本人だけでなく、朝鮮半島から移り住んだ人もいて、活気に満ちあふれていました。朝鮮半島系土器やムンクの『叫び』のような人面石など多様な遺物が発掘されたこの地は、まさに弥生時代のデパートと言えるかもしれません。

県内有数の穀倉地帯でもある原の辻遺跡の周辺では、現在、古代米が栽培されています。原の辻遺跡の復元建造物と青田が広がる眺めは、訪れた人を弥生時代へタイムスリップさせてくれるでしょう。

内海湾（壱岐市）^④

内海湾は、「一支国」の王都・原の辻を訪れる古代船が往来した玄関口であった。また、湾内には、小島神社へむかう通路が干潮時のみ海中から現れる神秘的な島も存在し、時代を問わず人を魅了する場所となっている。

カラカミ遺跡

〔市史跡〕（壱岐市）^④

原の辻遺跡と同じ弥生時代に栄えた環濠集落跡。交易を通じて鉄製品や鉄素材等を入手し、国内各地に鉄製品を供給する中継基地としてだけでなく、弥生時代を代表する鉄器生産の鍛冶工房として存在し、東アジア交易において重要な役割を果たしていた。

原の辻遺跡

原の辻一支国王都復元公園 〔国特別史跡〕（壱岐市）^④

弥生時代の環濠集落跡で、「魏志」倭人伝に記された一支国の王都で、弥生時代に海外交易の拠点として大いに栄えた。発掘調査によって、日本最古の船着き場跡や住居跡が確認されている。朝鮮半島や中国大陸、そして日本各地との交流・交易を物語る土器、中国大陸から持ち込まれた貨幣、日本最古のトンボ玉、そして国内唯一の人面石などの遺物が数多く発見されている。当時の王都の様子を復現し、「原の辻一支国王都復元公園」として一般公開している。

- 開園時間 8:30～日没まで
- 入園料 無料
- 駐車場 原の辻ガイダンスの駐車場利用のこと

原の辻ガイダンス

原の辻遺跡の発掘調査成果や復元整備の歴史などを紹介する展示室の見学や火起こしや勾玉づくりなどの古代技術を体感することができる体験室がある。

- 開館時間 8:45～17:30（最終入館17:00まで）
- 休館日 年末（12/29～31）
- 観覧料 入館無料 ただし古代技術体験は別途材料代が必要となります
- 駐車場 無料
- 住所 〒811-5322 壱岐市芦辺町深江鶴亀触1092番地5
- TEL 0920-45-2065

壱岐市立一支国博物館・長崎県埋蔵文化財センター

中国大陸・朝鮮半島と日本を結ぶ重要な地域として古来より栄えた「壱岐」の歴史を紹介。県埋蔵文化財センターと一体的な博物館として、出土品の保存処理などの発掘整理作業の様子を流れに沿って見学できる「観察路」などがある。



画像提供：壱岐市立一支国博物館

- 開館時間 8:45～17:30（入館は17:00まで）
- 休館日 月曜（祝日の場合は翌日）、年末年始（12/29～31）※ただしGWおよび夏休み期間中は無休
- 観覧料 一般400(320)円、高校生300(240)円、小中学生200(160)円
- ※（ ）内は20名以上の団体割引料金、そのほか各種減免制度あり
- 住所：〒811-5322 壱岐市芦辺町深江鶴亀触 515-1
- TEL：0920-45-2731

朝鮮半島との関係に左右される日本最果ての島々

最先端の文化の導入と交流が行われる一方、国境の島々は、異国へと向かう海の道の最終中継地、国防の最前線としての顔も持っていました。

4世紀以降の朝鮮半島では、高句麗と百濟、新羅、伽耶の四国が勢力を争っていました。大和政権は、朝鮮半島南部の百濟や伽耶の国々とともに、高句麗や新羅と戦い、国内では製作することができなかった最先端の鉄製品や高度な技術を手に入れました。

6世紀後半から7世紀前半（今から約1400年前）に築造された壱岐古墳群は、当時としては日本有数の墳丘規模を誇るものです。巨石で築かれた古墳の石室内からは、中国大陸や朝鮮半島の国々

から認められていたことを物語る多くの遺物が発見されており、それらの国々と精通した有力者が存在していたことがわかります。ひんやりと涼しい石室の中に身を置くと、古墳に眠った人物の権勢が静かに伝わってくるようです。



原の辻遺跡出土品

〔国重文〕^④
壱岐市立一支国博物館蔵
原の辻遺跡からは10万点以上の遺物が出土しており、その中の1670点が国の重要文化財に指定されている。



笹塚古墳出土品 〔国重文〕^④

壱岐市立一支国博物館蔵

笹塚古墳からは亀形飾金具をはじめ、多くの金銅製品が発見されている。出土した資料のうち、162点は国の重要文化財に指定されている。

双六古墳出土品 〔国重文〕^④

壱岐市立一支国博物館蔵

双六古墳からは中国の北齊で製作された日本最古の二彩陶器が発見されている。出土した資料のうち412点は国の重要文化財に指定されている。



壱岐古墳群 〔国史跡〕（壱岐市）^④

壱岐島内には、長崎県全体の約6割の古墳がある。中でも、双六古墳、笹塚古墳、兵瀬古墳、鬼の窟古墳、対馬塚古墳、掛木古墳の6基の首長クラスの古墳が国の史跡に指定されている。



壱岐風土記の丘 古墳館・古民家園 ^④

古墳時代から江戸時代までの壱岐の歴史を学ぶことのできる施設。古墳館では、国史跡「壱岐古墳群」に関する概要や位置情報や県最大の方後円墳“双六古墳”の築造の様子を再現した模型を展示。

- 開園時間 9:00～17:00（最終入館は16:30）
- 休園日 月曜日、年末年始（12/29～1/3）
- 入園料 一般100(80)円、中学生以下50(40)円
- ※（ ）内は15名以上の団体割引料金
- 住所 〒811-5544 壱岐市勝本町布気触324番地
- TEL 0920-43-0809



【トピックス】 福江島に見る遣唐使の足跡

遣唐使船の航路が北路から南路に変わると、五島が最後の出航地になった。「肥前国風土記」によれば、五島には相子田の停(青方湾)と川原の浦(岐宿)という繁栄している港があり、遣唐使船は三井楽の崎に至って発船、西を目ざした、とある。三井楽の柏崎には遣唐使船が飲料水にしたと伝えられる「ふぜん河」も存在している。

遣唐使派遣は838年が最後で、唐の先進文化を求め持ち帰るという国家プロジェクトが廃止されると、都人の五島に対するイメージが変化したようだ。10世紀の文学作品「蜻蛉(かげろう)日記」にあるように、亡き人に逢える島、西の最果ての地としての「三井楽(みみらくのしま)」「(国名勝)がその後も定着している。

ところで、明星院の銅造如来立像は白鳳仏として国の重要文化財に指定されている(秘仏)。その清楚なお姿、引き込まれるような微笑みの仏さまには、つい遣唐使とのつながりを思い浮かべてしまうが、どうだろうか。



明星院本堂 [県有形文化財] (五島市)㊦

五島で最も古い寺といわれ、806年(大同元)に空海が唐から帰朝する途中でこの寺に籠り、明星庵と名付けたという。五島家代々の祈願所で、1778年(安永7)再建の本堂には狩野派の画家が描いた花鳥画121枚の天井画があり、また銅造如来観音(奈良時代)などがある。



五島観光歴史資料館 ㊦

五島市の歴史や文化を紹介する施設。船の復元模型など、遣隋使、遣唐使についても紹介されている。

■開館時間 9:00～17:00(入館は閉館30分前まで、6月～9月は18:00閉館)
■休館日 年末年始(12/29～1/3)、※その他臨時休館の場合あり
■観覧料 一般230(190)円、高校大学生170(140)円、小中学生110(90)円
※()内は20名以上の団体割引料金
■住所 〒853-0018 五島市池田町1番4号
■TEL 0959-74-2300



三井楽(みみらくのしま) [国名勝] (五島市) ㊦

三井楽の断崖に建つ空海のこたばである「辞本涯」の碑。

ともづな石

[市史跡] (五島市)㊦

五島市岐宿町の白石湾は、古来遣唐使船が最後に停泊した港であり、遣唐使船を繋いだという「ともづな石」が安置・祀られている。



道の駅 遣唐使ふるさと館 ㊦

遣唐使についての資料や、『万葉集』など中の三井楽を詠んだ歌などを通じて古代における三井楽の姿を紹介。「万葉シアター」では、史実を参考にした「遣唐使ものがたり」などが上映されている。近くの白良ヶ浜万葉公園には遣唐使船を模った遊具が置かれている。

■開館時間 9:00～18:00
■休館日 年末年始
■観覧料 「万葉シアター」一般310(260)円、子ども210(150)円
※()内は15名以上の団体
■住所 〒853-0601 五島市三井楽町濱ノ畔3150-1
■TEL 0959-84-3555

【トピックス】 対馬の古墳と出土品

古来朝鮮半島との交易・交流および緊張の最前線に位置する対馬の有力首長は、4世紀になるとヤマト政権の影響を受けて畿内型の古墳を造るようになった。雑知の出居塚古墳(県史跡)は約40mの前方後方墳で、竪穴式石室からは柳葉形銅鏃12、管玉などが発見された。同じく雑知高浜にある根曾古墳群(国史跡)は、浜石を盛った積石塚のため墳形ははっきりしないが、5～6世紀のものである。また近くには横穴式石室をもつ7世紀のサイノヤマ古墳(県史跡)もあって、古墳時代の対馬の政治的中心が雑知地区にあったことがわかる。



矢立山古墳群

[国史跡] (対馬市) ㊦

7世紀後半の3基の古墳。埋葬者は畿内との結びつきが強い豪族と考えられている。

豊玉町郷土館

縄文時代のヌカシ遺跡・住吉平貝塚や、古墳時代の貝鮎崎古墳他、弥生時代のハロウ遺跡の石棺模型、出土資料などを展示。またシゲノダン遺跡、佐保唐崎遺跡から出土した朝鮮系青銅器(東京国立博物館蔵)のレプリカ等を紹介している。



■開館時間 9:00～17:00
■休園日 月曜、祝日、年末年始(12/29～1/3)
■入館料 無料
■住所 〒817-1201 対馬市豊玉町仁位370番地
■TEL 0920-58-0062

峰町歴史民俗資料館

縄文時代の狩猟文化を知る上での一級資料が出土した佐賀貝塚、弥生時代の集落遺跡である三根遺跡、箱式石棺が多数発見された小姓島遺跡、井手遺跡、弥生時代後期から古墳時代にかけての金属類が多数出土したガヤノキ遺跡の出土品等、他に民俗資料を展示している。



■開館時間 9:00～17:00(土曜日9:00-12:00)
■休園日 年末年始
■入館料 無料
■住所 〒817-1301 対馬市峰町三根451
■TEL 0920-83-0151

上対馬町歴史民俗資料室

弥生時代後期の朝鮮半島及び北部九州との交流を示す方格規矩文鏡や広形銅矛をはじめとする多くの副葬品が出土した塔の首遺跡(国指定史跡)を復元模型などで紹介している。そのほか朝日山古墳群(市指定史跡)、経隈墳墓などの貴重な出土遺物、上対馬の歴史や野生生物を紹介するほか、民俗資料も展示している。



■開館時間 9:00～17:00
■休館日 土日曜、祝日、年末年始
■入館料 無料
■住所 〒817-1701 対馬市上対馬町比田勝575番地1(上対馬総合センター内) ■TEL 0920-86-3052

663年、白村江の戦い以降、日本と新羅との外交関係が悪化すると、遣唐使は、老岐・対馬を通り、朝鮮半島西岸を経由して中国大陸に渡るルートから、五島西岸列島を経て東シナ海を渡り、直接中国大陸に入る危険なルートをとらざるをえなくなりました。当時の船の構造、航海技術では、ほとんど無事には帰ってはこられなかった時代、万葉の都人にとって五島は、日本の最果ての地であり、その最果ての地では亡くなった人にか

移り変わる海路―五島列島と遣唐使

うことができるという死生感から「みみらくのしま」と称されていました。三井楽の岸壁に立ち、千年以上も昔の風景と変わらぬであろう東シナ海の大海原を目の前になると、この地を最後に異国へと旅だつた人々や送り出す家族の覚悟や想い、そして804年に遣唐使船に乗って五島を出航した空海の「辞本涯」「本涯」日本」の果てを去る」という言葉が、時代を超えてこだまします。



参照:『旅する長崎学』12

金田城跡 [国特別史跡] (対馬市) ㊦

白村江海戦において唐・新羅連合軍に敗れたヤマト政権が、唐・新羅の来襲に備えて667年に浅茅湾奥の絶景の地に築いた朝鮮式山城。通称を黒瀬の城山という。山腹にめぐらされた石塁や谷あいにある城戸・水門は超一級の遺構である。

金田城跡 ● 銅造如来坐像 (黒瀬観音堂)

対馬市

● 対馬藩主宗家墓所
万松院の三具足 (万松院)
清水山城跡
金石城跡
旧金石城庭園
長崎県立対馬歴史民俗資料館
(朝鮮国信使絵巻)
対馬藩お船江跡

対馬の集下習俗
豆鼓の赤米行事

銅造如来立像 (海神神社)

[重要文化財] (対馬市) ㊦

統一新羅時代8世紀の仏像として非常に希な秀作と評価される。これまで2度の盗難にあり、関東と韓国から戻ってこられた。海神神社 (木坂八幡宮) のご神体5体のうちの1体と推測される記述が「対州神社誌」にある。

[トピックス] 中世の交易の痕跡をみる

14世紀になると日本の海の武士団の動きが東アジア海域で活発化した。彼らの交易活動は韓半島から中国沿岸、遠くは琉球にまで達し、時として海賊行為に及んで「倭寇」と恐れられた。対馬の早田氏や肥前の松浦党がその代表である。

東アジア交易網の広がりをうかがうことができる遺跡として、瑤瑤製の石帯、中国の大銭等が出土した対馬の水崎仮宿遺跡が早田氏との関連で注目されている。また、対馬・壱岐・平戸・五島などの遺跡からは高麗青磁・中国陶磁のほか東南アジア製も含めて多数の貿易陶磁が出土しており、さらにそうした地域に存在する日引石の石塔 (福井県若狭湾高浜産) は、日本海交易ルートの存在を証明するとともに、東アジア海域への広がりを示唆している。

海原を見守った防人の島

一方、壱岐と対馬では、白村江の戦い後、国防のために防人と烽火が置かれ、対馬には亡命百済人の技術による朝鮮式の山城「金田城」も築かれました。複雑に入り込んだ海岸に開かれた浅茅湾と天然の絶壁を利用して築かれた金田城跡に立ち、国境の海を見下ろすと、はるか東国から送られてきた防人たちの望郷の念に胸がつまります。



銅造如来坐像 (黒瀬観音堂)

[国重文] (対馬市) ㊦

黒瀬の集落で安産を祈る女神さまとして祀られてきたこの仏様は、渡来新羅仏とされているが、朝鮮半島残存の新羅仏にこれほど大きな (像高43.6cm) 作例はなく、なお研究が必要であろう。それにしても上品なお顔である。



岳ノ辻 (壱岐市) ㊦

壱岐島最高峰 (212.8メートル) の山で、山頂からは島全体はもちろん九州本土や対馬島まで見渡せる。岳ノ辻は古代より烽火台や遠見番所が設置され、国防の要衝として重要な役割を果たしてきた。



日島の石塔群 [県史跡] (新上五島町) ㊦

日島・曲地区にある中世から近世にかけての約70基の石塔などからなる古墓群。石塔に使用されている石は、関西方面の花崗岩、福井県の日引石など島外から持ち込まれたものが多い。大陸との交易品を若狭湾に運び、帰りの船にバラストとして日引石の石塔を持ち帰ったともいわれ、日島が関西地方と大陸との交流の中継地・拠点として栄えていたことを想像させる。

生池城跡 [市史跡] (壱岐市) ㊦

16世紀中頃に松浦党の一員だった源壺が築城した山城。居城があった山頂を中心に高低差が5メートル以上ある二重の空堀が掘られており、単なる居城としてではなく、実戦を想定した城として築城されたことがわかる。



山王山 (新上五島町) ㊦

御嶽 (左)、雌嶽 (右) からなる。御嶽中腹にある二ノ宮の岩窟内からは宋代の舶載鏡などの奉納鏡が発見された。この地が中国寧波 (ニンポウ) などの港と、平戸・博多を結ぶ交易ルートに位置していたことを想起させる。



青方神社 (新上五島町) ㊦

古名を山王宮といい、山王山の選拝所であった。1006年 (寛弘3) に高麗の船が攻めてきたとき、その降伏を願い大己貴命を祀ったという。



姫神社跡・姫神社 (新上五島町) ㊦

遣唐使船の航海祈願を行ったという田凝姫を祀った「姫神社跡」 (赤崎) と、江戸時代に入り遷座された「姫神社」 (相河)。

御船様

[町指定] (新上五島町) ㊦

舟形の自然石を祀る。無事帰還した遣唐使船の願解きを行ったと伝えられる。御船様の背景には山王山の堂々とした山容が聳えている。



ともじり石 (新上五島町) ㊦

遣唐使船を繋留していたという。民家の敷地内で、今も大切に祀られている。



新上五島町

● 遣唐使史跡

姫神社跡、青方神社、ともじり石
姫神社、錦帆瀬、三日ノ浦、御船様

● 日島の石塔群

● 山王山

三日ノ浦 (新上五島町) ㊦

三日ノ浦から遣唐使船が帆を修理したという岩場「錦帆瀬」をのぞむ (画面右側)。

国交断絶から復活へ 〜朝鮮通信使がつかないだ日朝交流の架け橋〜

室町時代の対馬は、島主・宗氏を中心に日本と朝鮮との間で外交の実務と貿易を独占してきましたが、豊臣秀吉の朝鮮出兵により一変し、国交が断絶してしまいます。長年、朝鮮との貿易に島の経済を頼ってきた対馬にとって、朝鮮との国交回復、貿易復活は死活問題であつたのです。

対馬藩は、朝鮮との国交回復交渉を行い、その間、日朝双方の国書を偽造するなど危ない橋を渡りながら、ようやく江戸時代最初の朝鮮通信使来日に成功します。その後、朝鮮貿易の復活も果たし、対馬藩の繁栄ぶりは万松院に古色蒼然と並ぶ歴代対馬藩主墓所の中でも、ひととき目を引く当時の藩主の墓所の巨大さからも偲べれます。以来、約200年に渡り、合計12回の日朝修好の象徴である朝鮮通信使の来日が続きました。

継承される交流

時代とともに、壱岐と対馬の中継地としての役割は希薄になっていきました。が、島の特産品や民俗行事には、交流の痕跡が残っています。壱岐の特産品「壱岐焼酎」は、大陸から伝わったとされる蒸留法を取り入れ、今では世界に誇れる産地ブランドとなっており、対馬の「対州そば」は大陸から伝わったそばの原種に近いものです。

また、稲作伝来の地といわれている対馬の豆・酸地区

は、宮中祭祀「新嘗祭」にも奉納したことがある古代米の一種、赤米を神田で栽培し、その赤米を御神体とする神事が行われており、亀の甲を焼いて吉凶をみる古代の占い「亀卜」もこの地区で受け継がれています。民間交流としては、朝鮮通信使行列の再現をはじめ、音楽祭、国境マラソンなど様々な日韓交流イベントが行われています。対馬高校ではハングルや韓国文化を学ぶコースが設置され、

文化8年の「朝鮮国信使絵巻」

〔国重文〕(長崎県立対馬歴史民俗資料館蔵) ④

対馬歴史民俗資料館所蔵2種類の絵巻のうち、宗家旧蔵のものは京都から江戸へ向かう道中絵巻で、前欠部分があるが、描かれている総人数は597人、馬147頭、そして犬1匹。制作年代は不明だが、正徳よりさかのぼる通信使を描いた可能性もある。もう一つは1811年(文化8)の易地聘礼、即ち棧原城へ向かう厳原場筋通りの行列である。描かれている朝鮮人は171人、日本人は423人、計594人に及ぶ。



対馬藩お船江跡 〔県史跡〕(対馬市) ⑥

対馬藩の藩船を係留・格納したドック跡。久田川河口に構築された人工の入江に、4基の突堤と5つの船渠があって保存状態もよい。ここから釜山の和館(倭館)や、大坂、長崎などへ出航した。



対馬藩主宗家墓所 〔国史跡〕(対馬市) ⑤

江戸時代、朝鮮国との外交・貿易の実務を担った対馬藩主宗家の墓所。菩提寺である万松院の山門のわきから百雁木と呼ばれる石段(実際は123段)を登ると壮大な規模の墓地・墓石を目にする。朝鮮貿易の収益は大きかった。



清水山城跡 〔国史跡〕(対馬市) ④

豊臣秀吉が朝鮮出兵に際して名護屋・釜山間に築かせた駅城の一つ。山頂に一ノ丸、下って二ノ丸、三ノ丸と続き、石垣・門址などの遺構が残っている。これまで毛利高政が築いたとされてきたが、宗義智が中心という新説が出された。



勝本城跡 〔国史跡〕(壱岐市) ④

豊臣秀吉が朝鮮出兵〔文禄・慶長の役〕の際に築城した出城で、松浦鎮信(平戸)が中心となり、有馬晴信(島原)、大村喜前(大村)、五島純玄(五島)などの領主の協力によって4ヵ月の月日で、1591(天正19)年に築城された。



万松院の三具足 〔市有形文化財〕(対馬市) ⑧

朝鮮国から東照宮権現堂に贈られた三具足(花瓶・香炉・鶴亀の燭台からなる仏具)で、東照宮廃絶後徳川家康像、歴代將軍位牌などとともに万松院に移された。万松院は初代藩主宗義智の法号をとって建立された宗家の菩提寺。



【トピックス】 美味しい交流！

古代からの人々の往来とともに、生活の根幹である食をめぐるものや技術も自然に行き来していただろう。大陸からや朝鮮半島を経由して伝わった原料や製法をもとに、各地で試行錯誤して「美味しいもの」がにつくられ、今に継承されている。



対州そば ⑥

日本のそばは、縄文時代後期に大陸から朝鮮半島を経由して伝わったという。対馬のそば(対州そば)は原種に近く、その小粒で風味が強い独特の味わいが珍重されている。



壱岐焼酎 ⑤

大陸から伝来した蒸留方法を利用し始まったという、16世紀までさかのぼる歴史を有する壱岐焼酎は「麦焼酎発祥の地」として知られている。



五島うどん ⑥

遣唐使により中国から伝えられた奈良時代の麵「索餅」に比定される。近年、中国の浙江省永嘉県で岩担索麵という五島うどんとほぼ同じ製法の麵が発見された。

日本遺産

「国境の島 壱岐・対馬・五島～古代からの架け橋～」に関する問合せ先

- 長崎県文化振興課 TEL:095-895-2762
- 壱岐市観光商工課 TEL:0920-48-1135
- 壱岐市教育委員会文化財課 TEL:0920-45-2728
- 対馬市歴史のまちづくり・世界遺産登録推進室 TEL:0920-53-6111(代表)
- 五島市観光交流課 TEL:0959-74-0811
- 新上五島町教育委員会文化財課 TEL:0959-42-0183

厳原港まつり 〔対馬市) ⑤

メインイベントは朝鮮通信使行列パレードで、対馬市と朝鮮半島との固い絆を象徴するものです。8月第1土・日曜日に行われ、毎年3万人を超える人々が国内外から訪れます。



金石城跡 〔国史跡〕



旧金石城庭園 〔国名勝〕(対馬市) ④



中世末(戦国期)から近世前期にかけての対馬島主宗氏の屋形、居城跡。延宝6年(1678)に棧原城が完成するまで対馬府中の中心に位置していた。清水山を借景として造営された庭園・心字池(国名勝)も見事である。ちなみに、金石城を整備した2代藩主義成の正室は権大納言日野家の出自。文化8年(1811)の朝鮮通信使来島(易地聘礼)に際して増築され、一行の宿舎にあてられた。

【特集2】

「隠元さん」と長崎

―長崎に根付いた黄檗文化 幸福な日中文化交流のかたち

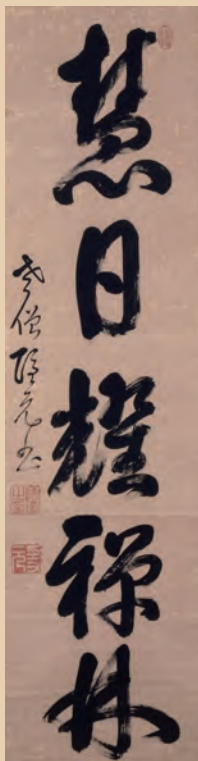
黄檗宗の開祖「隠元さん」

中国・明末清初の高僧・隠元隆琦禪師（1592～1673）は、興福寺（長崎）の住持・逸然性融からの数度の招請を受けて、廈門から鄭成功が仕立てた船で東渡し、1654年（承応3）7月興福寺に約20名の弟子とともに入山しました。中国で隠元は臨済宗・福清黄檗山（古黄檗）（福建省福清市漁溪鎮）の高僧として、すでに人々に広く知られており、かつ63歳の高齢でもあったため、周囲からの強い反対がありました。それを押しての決断でした。日本の禪宗に新しい風を吹き込み、はじめ3年の日本滞在の予定であったのが、ついには永住し、1661年（寛文元）に宇

治の地に黄檗山萬福寺を創建し、「黄檗宗」の開祖となりました。

長崎には約1年の短い滞在でしたが、人々に熱狂的に迎え入れられ、隠元を中心とする黄檗僧らがもたらした「黄檗文化」は宗教、芸術、食などさまざまな分野において強烈な影響を与え、唐寺で本格的な禪宗を伝えただけでなく、芸術の分野では、隠元とその高弟である木庵と即非の「黄檗三筆」に

はじまる「唐様の書」が大流行し、絵画においても逸然や中国からもたらされた黄檗絵画の様式が、その後の唐絵目利等からなる長崎絵画界の本流となっていました。



隠元筆 一行書
「慧日耀禅林」㊦
（長崎歴史文化博物館蔵）



唐寺での読経の様子。人々が興味深げに取り囲んでいる。
（焰口施食儀「長崎古今集覧名勝図絵」下 天保12頃 長崎歴史文化博物館蔵より）㊦

本特集では、習近平国家主席が人民中日友好大会で「日本で隠元大師は仏教の教義だけでなく、先進的文化と科学技術も伝え、日本の江戸時代の経済・社会発展に重要な影響を与えた」と演説したように、近年、中国本土の研究者たちの熱い視線も集めている隠元と黄檗文化、そして長崎との結びつきについて紹介します。



喜多道矩筆、隠元隆琦賛
「隠元禪師画像」
（長崎歴史文化博物館蔵）㊦
獅子に座す姿は、隠元を文殊菩薩に見立てられたものとも考えられている。

【インタビュー】

「隠元禪師のふるさと」訪問の旅を終えて

東明山興福寺 松尾法道 住職

中国で高僧の地位にあったにもかかわらず、来日した隠元隆琦禪師。いま、故郷の中国国内でも「隠元さん」顕彰の動きが本格化しています。そのなかで平成28年1月に実施された「隠元禪師の中国での足跡を訪ねる」訪問団（総勢22名）の団長を務めた興福寺の松尾法道住職に、旅の感想、そして現代の長崎と「隠元さん」などについてお話をうかがいました。

Q：「隠元禪師の中国での足跡を訪ねる旅」を終えてのご感想をお聞かせください。

A：廈門大学の林観潮先生や昨年設立の福清黄檗文化促進会（会長・林文清氏）のお手配で、行く先々にて「日本へ隠元禪師を呼び寄せた長崎の興福寺の住職が来る」と大歓迎をい

Q：今回の旅を経て、長崎や日本のみなさんに伝えたいことを教えてください。

A：まず、隠元さんはよくぞ遠路長崎までお越しいただいた、ということ。現代でも、旅をするには様々な不安があります。隠元さんは、交通も通信も未発達な当時、見知らぬ外国の地への出立を決断された。自分が必要とされるならば、日本に行つて、仏様の教えを広めようという「大きな使命感があったからだと思うのです。招請は使者が書状を携え、長崎から何度も命がけの渡航をしたはずです。その強い想いも隠元さ

んを動かしたのだと思います。Q：隠元さんと現代に生きる私たちのあいだには、どのようなつながりがあるのでしょうか。A：「インゲンマメ」が有名ですが、それよりも食卓が象徴的なのではないかとおもいます。それまでは一人に一膳。身分の序列で並んでいたものが、「食卓を囲う」ようになりました。これは一つの物を皆で分け合う、皆で仲良くしなさいという「和の心」。これが隠元さんの伝えたい一番大きな物だったと思います。当時（江戸時代）は、封建制度の時代でしたから、たやすくは受け入れられませんでしたけれど、明治になって、「ちゃぶ台」として私達の食文化をがらりと変えてしまうほどになります。それからお客様が来られた時にお茶を出すのも隠元さんから。新聞や名刺、公文書に使われてい



万福寺大雄宝殿を見上げる松尾住職、隣は林観潮氏

る「明朝体」もそう。原稿用紙もそう。お寺の木魚もじつは隠元さんが伝えたもので、例えば鎌倉時代の時代劇で、お寺で木魚の音がしたなら、それは時代考証が怪しいのではということになります。ありとあらゆるところに隠元さんが伝えたものが隠れているのです。それは特別なものではなく、意識しなければ気がつかないほどに今の私達の生活に浸透して日本のものになっています。それをぜひ皆さんに知っていただきたいですね。

苦難の旅を乗り越えて、日本の仏教界に生涯を捧げ、私達の生活を変えるほどの影響を及ぼしたその功績を、私達は顕彰し続けていかねばいけないと今回の旅を通じてあらためて思いました。

「初登宝地」東明山興福寺

興福寺（県史跡）は、1620年（元和6）に唐僧・眞圓が小庵を作ったことにはじまると伝えられます。隠元禪師が1654年（承応3）に来日後はじめて入山した寺院であり、隠元禪師を招聘したのも同寺の三代住持の逸然性融でした。二代の黙子如定は、石橋「眼鏡橋」（重要文化財）を架けたことでも知られています。1663年（寛文3）の市中の大火で焼失したものの再建され、中国の工匠による本堂・「大雄宝殿」（1689・1883年再建、国重要文化財）や、同堂内の瑠璃燈（市有形文化財）、「あか寺」と称される所以となった山門（1690年、県有形文化財）、媽姐（媽祖）堂（県有形文化財）、鐘鼓樓（1691年、県有形文化財）、唐僧墓地（市史跡）など黄檗文化を象徴する文化財であふれています。



■拝観時間 7:00～17:00 *年中無休 ㊦
■拝観料 一般300(240)円、中学生200(160)円、小学生100(80)円 ()内は団体料金
■住所 〒850-0872 長崎県長崎市寺町4番32号
■TEL 095-822-1076



逸然筆、即非賛「白衣観音観瀑図」
1665年（長崎歴史文化博物館蔵）㊦
長崎における漢画の祖・興福寺三代住持・逸然による

長崎・唐寺めぐり

長崎に明（中国）の商人らが多数来航する中（※1635年に唐船の来航は長崎に限られました）、唐船に積まれた航海の安全を守る「媽祖（菩薩）」を長崎滞り期間中に安置する祀堂が必要となり、同郷団体である「軒」ごとに興福寺（南京、1620年創建）、福濟寺（泉州・漳州、1628年創建）、崇福寺（福州、1629年創建）の「唐三ヶ寺／三福寺」が建立されていきました。それは、キリスト教禁教下において、商人らが仏教を信仰していることを証明するための行為でもありました。これらの寺院は、1654年（承応3）の隠元禪師の来日により、禪宗寺院（黄檗宗）としての趣きが濃くなり、のちの1677年（延宝5）には、宇治の萬福寺で修行した禪僧によって聖福寺も建立され「四福寺」と称されるようになります。





越中哲也氏（えっちゅうてつや）
1921年長崎市生まれ。1944年龍谷大学文学部仏教学科卒業。長崎市立博物館長、純心女子短期大学教授等を歴任。2001年第12回龍谷賞受賞。現在、長崎歴史文化協合理事長。美術工芸を中心とした長崎の歴史を専門とする。

あたり、専門家としての僧侶が求められる。当時の福建商人の中心宗教が黄檗宗でした。それでは黄檗宗の僧侶をお呼びしよう、という流れに

現代の衣食住の基礎となっているのは江戸時代です。江戸時代の文化の源流は「鎖国」にあります。長崎は江戸（東京）の出張所なんです。中央（江戸・東京）で必要とするものを長崎で入手する。つまり、長崎の文化というのは、現代の日本文化の基礎になったと言えるのではないのでしょうか。このことを頭の中にいれておいていただければよいと思います。

さて、隠元が1654年（承応3）、長崎に来たことによって、そ

としての宗教は、航海安全が第一だったと思われます。やがて“お寺”としての役割が必要となるに

（越中先生）
昭和30年代に中国福建省の黄檗山に調査に行ったことがあるんですよ。当時は何もなかったですね。（山津波などで）流れてしまっ

た。当時の長崎における民間信仰としての宗教は、航海安全が第一だったと思われ

Q：隠元を中心とした中国文化の長崎でのひろがりなどについてお話を聴かせてください。

これまで貿易中心であったものが、比較的“文化的な”おいのするものが伝わったとい

今に根付く長崎の中国文化

「インタビュー」

長崎歴史文化協合理事長
越中哲也氏

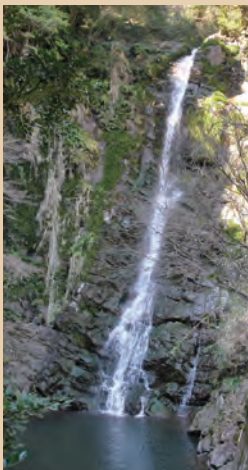
なっただけです。江戸幕府が直接招聘した訳ではないですから、長崎の「在留唐人」の相当な財力が投入されたわけ

隠元もさることながら、曹洞の東皐心越（1639〜95）も強い影響を与えた人物です。この人は水戸光圀に呼ばれて水戸藩へ行きます。心越は、隠元を上回る学者ではなかったかと思われま

現代の衣食住の基礎となっているのは江戸時代です。江戸時代の文化の源流は「鎖国」にあります。長崎は江戸（東京）の出張所なんです。中央（江戸・東京）で必要とするものを長崎で入手する。つまり、長崎の文化というのは、現代の日本文化の基礎になったと言えるのではないのでしょうか。このことを頭の中にいれておいていただければよいと思います。

長崎の小秘境「瀧の観音」長瀧山霊源院

1659年（万治2）広東の商人・許登授が長崎へ向け航海中に嵐に会ったものの、九死に一生を得たことから、古より霊場として知られていた「瀧の観音」を信仰し、1669年（寛文9）に同地に観音堂を建立して、広東から具奉した魚籃観音菩薩を本尊としました。もとより1660年（万治3）に奥の院に、木庵の弟子鉄巖が小庵を設けていたことから、観音堂建立にともない鉄巖が請われて黄檗宗寺院として開山されました。領主・諫早家の祈願寺であったことでも知られています。木立に包まれた静寂の中に、苔むした石仏や渓谷沿いの磨崖羅漢、石橋などが佇み、ここちよい滝の清韻が日常の喧騒をしばし忘れさせてくれます。長崎の県指定名勝の第一号。



■拝観料 大人200円、小人100円
■住所 〒851-0136 長崎市平間町1646番地霊源院境内
■TEL 095-838-3701

今もお全国から華僑が集う 聖寿山崇福寺

福州地方の商人を檀越とする唐寺で、1629年（寛永6）僧・超然が招聘され、1635年（寛永12）に殿堂が建立されたと伝えられます。はじめ唐船に乗せられた「媽祖」を安置し、航海の安全を願う儀式等が行われていたとい

■拝観時間 8:00〜17:00 *年中無休
■拝観料 大人300円、高校生200円、小・中学生無料
■住所 〒850-0831 長崎県長崎市鍛冶屋町7-5 ■TEL 095-823-2645

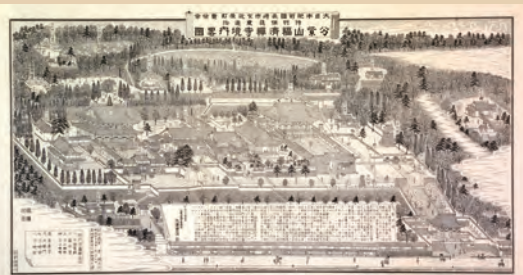


釈迦三尊像と十八羅漢

往時の壮大な伽藍を想う 分紫山福濟寺

中国の建築様式で建てられた壮大な寺院で、1927年（昭和2）には国宝に指定されました。1628年（寛永5）に泉州から渡来した覺海が小庵を建てて媽祖を祀ったのが始まりと伝えられます。隠元来日の翌年に隠元の高弟で書をよくした木庵性瑠が渡来して、ここに入山しました。はじめ泉州寺、のちには漳州出身の潁川家が大檀越となったこと等から漳州寺と称されるようになり、長崎の唐寺で最大の伽藍を誇りました。泉州出身の第7代住持の大鵬は墨画を善くしたことで知られています。また、幕末には、勝海舟と坂本龍馬も逗留したと伝えられています。布袋像や沈南蘋筆「牡丹の戸襖」などが人々に愛されていましたが、1945年（昭和20）に原爆により焼失しました。現在は原爆被災者や戦没者を慰霊する「萬国靈廟長崎観音」が建立されました。

■拝観時間 8:00〜17:00
■住所 〒850-0052 長崎市筑後町2番56号
■TEL 095-823-2663



「大日本肥前国長崎市下筑後町黄檗宗特別保護建造物 分紫山福濟禅寺境内略図」修纂館版1923年頃（長崎歴史文化博物館蔵）^⑤



奇矯な笑みの布袋様 万寿山聖福寺

興福寺、崇福寺、福濟寺の「三福寺」とあわせ、「四福寺」と称されています。木庵の弟子で、長崎生まれの禅僧・鉄心道胖のために、1677年（延宝5）に長崎奉行や在留唐人らによって創建されました。黄檗宗寺院特有の伽藍配置を継承した建造物は、鉄心が修行した萬福寺に倣った建築様式で、桃の装飾が目目を引く大雄宝殿（1715年改修）や、布袋が福々しい笑みで迎えてくれる天王殿（1705年）、山門（1703年）、鐘楼（1716年頃）が建てられています。これら4棟は2014年（平成26）に重要文化財に指定されました。また媽祖堂が設けられなかったのも特徴としてあげられるでしょう。幕末には、海援隊の「いろは丸」と紀州藩船との衝突事故の賠償交渉が行われた場となったことでも知られています。

■住所 〒850-0053 長崎県長崎市玉園町3番77号
■TEL 095-823-0282



弥勒菩薩の化身とされる布袋



「コラム」

「唐絵」と呼ばれた絵画

——長崎での事例

長崎歴史文化博物館 研究員 白木菜保子



河村若芝「布袋渡河図」1686年（長崎歴史文化博物館蔵）^⑤

という禅宗の伝統の中にあ
りました。黄檗の肖像画で
は特に、中国の伝統的な線
描と西洋からもたらされた
陰影法を合わせた技法が用
いられ、喜多道矩（？）16
63・元規（1663）17
09頃活躍）によって真に
迫った肖像画が描かれま
した。

福建出身の陳賢（生没年

不詳）が描いた白衣観音図
は、淡彩による清涼な空気を
まとっています。一方で来日
し、唐絵の祖といわれた逸然
性融（1601）68）や弟
子の河村若芝（1638）
1707）が描いた羅漢や
布袋は、アーチ状に薄く開か
れた上下瞼と上向きにカー
ブする目尻を特徴としてい
ます。赤・青・緑といった原色
の鮮やかな色遣いとともに、
中国の神仏がまとう靈妙な

雰囲気演出しています。こ
のような神仏の雰囲気は、現
在、福建省の寺院に祀られて
いる仏像にも共通します。そ
れまでの日本仏教にはなか
った健康的な明るさと一種
の妖しさを合わせもった絵
画が、黄檗宗という外来の宗
派への興味をかきたてる要
素の一つとなっていたよう
に思われます。

初期の黄檗絵画は、逸然
性融などの来日した黄檗僧
によって描かれたものが、
次第にその担い手は長崎在
住の日本人となりました。
さらにその次世代は黄檗僧
にとってもなっており、各地へ移動
し、その結果、各地に在住す
る仏絵師が肖像画の担い手
になった例もあります。ま
た、思いがけないことに黄
檗絵画の担い手は、描くジャ
ンルに強い拘りを持つてい



山本若鱗「黄檗僧画像」
（長崎歴史文化博物館蔵）^⑥

なかったようです。肖像画
を描いた喜多元規は、達磨
図（神戸市立博物館蔵）を描
いています。達磨は5〜6
世紀のインド人ということ
ですから直接顔を見ることが
できません。しかし、陰影
を巧みに用いて本物らしく
描こうとしているところに
絵師の努力を感じます。2
本の前歯を見せる定型を踏
襲しているところも見どこ
ろです。後年になると、河村
若芝の弟子筋である上野若
元（1668）1744）や
山本若鱗（1721）180
1）といった人々が出て、若
芝が多く手掛けた道釈人物
画だけでなく、肖像画や花
鳥画も描きました。佐賀藩
に仕えた若元であれば、何
でも描けなければならぬ
という責務がありますが、
若鱗は肖像画にも長けてお
り、若芝系の絵師としては
異例の経歴といえます。唐
絵」という広い範囲を包括
する呼び名によって、自ら
の画系以外の絵画も勉強す
る必要を感じたのかもしれ
ません。

江戸時代、中国との貿
易を行っていた長崎に
は、様々な文物といっし
よに多くの絵画が渡来し
ました。なかでも黄檗宗
の伝来とともに伝わった
仏教絵画は、多くが明時
代の福建周辺で描かれま
した。黄檗僧の肖像画や、
穏やかな微笑みをたたえ
た仏、鮮やかな色彩を特徴
とする羅漢図など様々な
作風がありますが、一ま
まりにして「唐絵」と呼ば
れました。同じジャンルの
絵画とするのは疑問があ
るかと思いますが、当時
は隠元禪師の来日から約
90年後に訪れた中国人画
家・沈南蘋（1682〜？）
の花鳥画も含め、中国・朝
鮮絵画の総称として「唐
絵」という言葉が用いら
れました。なお、黄檗宗と
もにもたらされた絵画は、
現在「黄檗絵画」と呼ば
れています。

黄檗絵画の一部をご紹
介します。黄檗僧の肖像
画は、師の姿を絵に留め、
印可と共にもらいうける

大村市立史料館

ミュージアム
逸品紹介

大村家史料

大村市立史料館は、郷土大村
の歴史資料を保存活用するた
め、昭和48年に開館した館です。
大村藩2万7千石の城下とし
て栄えた大村市には、藩関係古
文書など多くの歴史史料が旧
家に残っており、その保存活用
が課題となっていました。その
ために設置されたのが市立史
料館です。

さて、当館の中心をなす史料
群はなんといっても「大村家史
料」です。これは、旧藩主大村家
に残された史料で、藩政史料を
中心に、約3000点
に及びます。江戸時代
初期の史料はやや少な
いものの、大村家が一
度も転封することなく
この地を治めたことか
ら、江戸時代を通して、
対幕府関係、領内支配
関係、藩主家の交際な
ど体系的に見ることが



九葉実録 ①



新撰士系録 ①



大村市教育委員会文化振興課
係長 今村 明

九葉実録

新撰士系録

できます。大村藩の特徴とも言
える異国警備やキリシタン対策
に関する史料も含んでおり、小
藩ながら江戸期全般の藩政を捉
えることができる貴重な史料群
となっています。今回は、大村家
史料の中からよく利用されるも
のを紹介します。

害まで、藩政の様々な事象を捉
えることができます。まさに大
村藩でいつ何が起こったのかを
知ることができ、大村藩政研究
の基本史料といえます。「九葉実
録」は、大村史談会から翻刻出版
され、併せて索引も作られてい
ることから、古文書が苦手な人
でもかなり詳細な調査を行うこ
とができます。

います。この史料を利用する人
は、先祖などの人物について調
べる方々が多く、史料館でも最
も閲覧が多い史料となってい
ます。「新撰士系録」は翻刻出版
されていませんが、久田松和則
氏によって索引が作成されて
おり、約27000名の藩士を
瞬時に見つけ出すことができ
るようになっていきます。

「九葉実録」は、4代藩主大村
純長以降、明治初期まで及ぶ、編
年的に記された藩政日記です。
その内容は、藩主の行動や藩士
の任免、大小事件から果ては災

「新撰士系録」は藩士の家系
図集で、各家の祖から幕末期ま
でが収められており、現在77巻
が伝えられています。親子一族
関係から藩士の履歴などを詳
細に知ることができ、人物調査
には欠かせない史料となつて

さて、これまで寄託であつた
大村家史料は、昨年12月に大村
家から大村市に寄贈されまし
た。現在、新しい歴史資料館の
整備を進められており、今後、
これらの史料を多くの人に活
用して頂けるよう努めていき
たいと考えています。

住所:〒856-0831 長崎県大村市東本町481(大村市立図書館2階)
TEL: 0957-53-1979
URL: <http://www.omura-dejihaku.jp/odal/index.php>
■開館時間 10:00 ~ 18:00
■休館日 月曜、祝日、毎月第3木曜日(祝日の場合は翌日)、
年末年始(12/28 ~ 1/4)、特別整理期間(7日間以内)
■駐車場 図書館と併用



①

ミュージアムの人々.....①

平戸城

Hirado Castle

(公財) 平戸市振興公社

施設長・学芸員 浦部知之 さん
Tomoyuki Urabe



対外交流の要衝であった平戸の歴史を紹介するコーナー



平戸城外観



明治天皇の祖母となった中山愛子(9代藩主松浦清[静山]の娘)を紹介するコーナー

住所:〒859-5121 平戸市岩の上町1458
TEL 0950-22-2201
<http://www.hira-shin.jp/hirado-castle/>
■開館時間 8:30 ~ 17:30
■休館日 12月30・31日、その他臨時休館あり
■観覧料 大人510円、高校生300円、小中学生200円
30名様以上2割引ほか

平戸の宝は、日本の宝。

平戸の歴史に惹かれて

平戸城は平戸の歴史・文化を多面的に紹介するという考え方のもと原始・古代から近世までを取り扱っています。主な展示品としては、鑢頭の太刀(重要文化財)や松浦家にゆかりの古文書・美術工芸品があります。

施設長・学芸員の浦部知之さんは平戸出身で、そのキャリアは、松浦史料博物館に古文書整理のアルバイトとして入ったことに始まるそうです。元々歴史に興味があったため意欲的に取り組み、翌年には学芸員補となりました。資料の整理やレファレンス業務にあたり、木田昌宏学芸員(のち館長)から古文書解読などの手ほどきを受け、島外から来館した著名な研究者らの史料調査に立ち会い、その研究者からの話や数々の古文書・所蔵品から松浦史料博物館と平戸の歴史のすばらしさを再認識しました。そして、「平戸の宝は日本の宝」であるとの思いを強くし、もう少し勉強したいと、学芸員の資格を取得しました。その後、1996年(平成8)から平戸城に籍を移し、今年で20年となります。

この間、1999年度(平成11)から始まった「平戸観光ウェルカムガイド」の育成に世話人として尽力し、その後、この組織は2004年度(平成16)にNPO法人に改組し、2010年度(平成22)まで理事長として活躍しました。「地域づくりは人づくりから始まる」をモットーに実践し、現在、語り部として20人以上が活動しているそうです。

また、地域の宝を研究者だけが抱え込んでいるだけではいけないという考えから、平戸の歴史・文化を一般にも広めるため「平戸検定」を始めました。毎年70人以上が参加しているこの事業に対しては、特に平戸を離れた人たちから平戸の歴史や文化のすばらしさを改めて知ることができたとの声があがっているそうです。

現在、平戸市内の旧家から寄託を受けた平戸藩10代藩主松浦熙とこの旧家の先祖にあたるある大工の交流を物語る展示を行っています。この大工の仕事ぶりに感銘を受けた藩主が、この大工に贈った「名前」にまつわる文書や記念の大工道具などが紹介されています。「一藩主が大工である一領民とこれほどに心の交流をしていた例は全国にもないのではないか。一人一人を大事にする平戸藩の気風を物語るエピソードだろう」



と浦部さん。今後も「地域の方からの平戸の歴史にまつわる資料の寄贈を進めて展示内容を充実させたいですね。資料の散逸を防ぐとともに、地元の宝は地元にあることで生きると思うからです」と意気込みを語られました。



この日は「火山大爆発実験」で火山灰が噴き出す原理を模型で再現。実演は長井大輔学芸員。客席からも実験に参加する。

この日は「火山大爆発実験」で火山灰が噴き出す原理を模型で再現。実演は長井大輔学芸員。客席からも実験に参加する。

本館は、1990年11月に始まった平成噴火から96年の噴火終息宣言まで、この地で何が起き、何が残ったのか、自然の驚異と災害の教訓を風化させることなく正確に後世へ伝える使命を帯びて設置されたわが国唯一の「火山体験ミュージアム」です。

1階フロア有料展示ゾーン内では、毎日2回、サイエンスステージ(約15分間)が開催されています。ここでは地震や火山活動などを分かりやすく説明する実験が行われており、取材当日は、学芸員・長井大輔氏による「キッチン火山実験 火山大爆発実験」が実演されていました。最近、活発に噴火している火山の噴火の仕組みを身近なキッチンの材料で再現するというもので、客席側の子どもたちも観るだけでなく参加できる、たいへんわかりやすい実験となっていました。長井学芸員によると、サイエンスステージの実験プログラムは現在のところ5種類あり、日替わりで実演されている

サイエンスステージ

雲仙岳災害記念館がまだずドーム

自慢の体験プログラム 見て・触れて、火山や防災を リアルに体感して学習

サイエンスステージへの参加にこれら装置類での体験を組み合わせることで、本館に訪れる人たちは、よりリアルな体験が期待できます。火山や防災を学ぶことができるようになります。



「平成大噴火シアター」。映像と連動して床が動き、噴き出す熱風で災害を疑似体験(80人収容、上映約7分間)。

同じフロアには、直径14メートルの大迫力ドーム型スクリーン映像と、これに連動して床が動き、熱風が吹き出すことで火砕流・土石流を疑似体験できる「平成大噴火シアター」(80人収容、上映8分間)や、1792年(寛政4)の噴火、「島原大変肥後迷惑」を歌舞伎の手法で昔話風に表現した「島原大変劇場」(上映13分間)もあります。



1階フロア有料ゾーン内にあるサイエンスステージ

住所:〒855-0879 島原市平成町1-1
TEL:0957-65-5555
URL:<http://www.udmh.or.jp>
■開館時間 9:00 ~ 18:00(入館17:00まで)
■休館日 年中無休
(※4月に5日程度メンテナンス休館あり、要問い合わせ)
■観覧料 大人1000(800)円、中高生700(560)円、小学生500(400)円
※()内は15名以上の団体料金
■駐車場 無料(一般車両400台、バス20台収容可)



展望塔からは、雲仙・普賢岳の平成新山(溶岩ドーム)を眺望することができる。



「西坂公園内にある舟越保武作《長崎二十六殉教者記念像》。その背後に日本二十六聖人記念館、右奥にはガウディのエッセンスを感じさせる日本二十六聖人記念聖堂・聖フィリッポ教会が見える(いずれも設計は今井兼次)。

建物探訪

ガウディを紹介した建築家 今井兼次の代表作

日本二十六聖人記念館

慶

長元年12月19日(1597年2月5日)に6人の外国人宣教師と日本人20人が殉教した西坂の二十六聖人殉教地(県指定史跡)に建つ資料館です。1962年、長崎二十六殉教者記念像(彫刻家・舟越保武作)、日本二十六聖人記念聖堂とともに建築されました。記念堂と聖堂の設計はいずれも建築家・今井兼次(1895〜1987)によるもの。今井は、昭和初期にスペインの建築家・アントニオ・ガウディを日本に紹介した人物としても知られています。

本館建築の特長について、館長のデ・ルカ・レンゾ神父は、「建物に入ることで、来館者に対し、殉教者あるいは受難の歴史を語りかける、その心の準備をさせる仕掛けがあるのです。聖堂も

含めて入口が分かりにくい位置にあるのは、『探せば、見つかる』という聖書の一節を表現した演出で、入口が狭くて空間が広がっているのも『狭い戸口から入りなさい』という聖書のことばによるものです。華やかな広々とした道ではなく、狭い道、ある意味では自分の心に問いかけるような「修行」のイメージが今井のなかにはあったようです。ここは殉教の地であるから、心を引き締めて観るようにというメッセージが込められているのです。聖堂だけ、記念館だけ、ではなく、二つをワンセットとして観てほしいですね」と説明されます。また、長崎県内在住の人への希望として、「県外からの来訪者は、事前に勉強して来られているので、意外と



1階の展示室



「栄光の間」
殉教者をたたえる聖なる空間。天井にはステンドグラスを用いた十字架が設けられている。



住所：〒850-0051 長崎市西坂町7-8
TEL：095-822-6000
URL：http://www.26martyrs.com

■開館時間 9:00〜17:00
■休館日 年末年始のみ休館(12月31日〜1月2日)
■観覧料 一般500(400)円、中学生300(200)円、小学生150(100)円
※()内は20名以上の団体料金
■駐車場 西坂公園利用者用(長崎市管理駐車場 9:00〜17:30) 無料(普通車10台)

ミュージアムの人々 ② みのつる資料館

Minotsuru Museum

館長 下田泰義さん
Yasuyoshi Shimoda



台湾で採集したチョウの標本をもつ下田館長

世界の秘境を調査した 館長の経験談が収集資料の価値に 厚みを加える。

国の重要伝統的建造物群保存地区となっている雲仙市国見町神代小路地区の一角に2001年12月、開設された私設の資料館です。館長の下田泰義さんは、県内中学校に勤務する傍ら、世界各地の秘境を調査してきた人物。1978年に文部省派遣教員として台湾の台中日本人学校に勤務。同地で高山植物やチョウの観察・採集。日中合同のチベット高原タン格拉山脈学術登山隊では、植物調査に従事し、グラタンドン雪山(6621m)に外国人として初登頂。また、第29次(’87年)、第41次(’99年)南極観測隊員として隕石探査に尽力したというたいへんめずらしい経歴の持ち主です。

「日本人学校勤務から帰国した20歳代後半頃には、行った先々で採集した資料を展示する施設をつくろうと考えていました。チベットで採集したものや南極で入手したものがたまると、いよいよこれは資料館をつくらなければという思いが強くなりました。」

着想から20年以上の歳月をかけて建設された館内の1階には、島原の乱関係の古文書類、台湾・パイワン族の伝統衣装、卑南遺跡(台湾台東市郊外)出土の土器・石器類、2階には、館長自身が採集したチョウをはじめとする各地の珍しい昆虫標本、実際に手にとることができる鉄隕石や恐竜の卵の化石標本があり、南極調査関連の資料コーナーも設置されています。

「中学校の教諭では初参加となった29次の南極越冬では、雪上車が目の前でヒドゥンクレバス(雪に覆い隠された深い割れ目)に突っ込んで30mも落下してしまいました。自分が底まで降りて行って、乗っていた隊員2名を救助したんですよ」

下田館長でなくては語れない世界の秘境でのエピソードが加わることで、数々の展示資料はさらに存在価値を増します。

「みのつる資料館」は、全国でも希有な秘境訪問のできる資料館となっています。



1階の有明海・郷土コーナーと台湾・高砂族コーナー



2階では、世界各地の昆虫標本や、自然史資料などを展示。



恐竜の卵の化石や鉄隕石の標本は、実際に手に取ることができる。



住所：〒859-1303 雲仙市国見町神代丙132-4(小路地区)
TEL:0957-78-1766

■開館時間 第4土曜、又は電話予約可能
■休館日 第4土曜以外の日
■観覧料 無料
■駐車場 3台



「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」世界文化遺産登録決定！

2015年(平成27)7月にドイツのボンで開催された第39回ユネスコ世界遺産委員会において、「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」が世界文化遺産として登録されました。

長崎市内の旧グラバー住宅や端島炭坑(軍艦島)をはじめとする、九州・山口地域を中心に所在する一連の産業遺産群は、日本が幕末から明治後期(19世紀半ば～ 20世紀初頭)にかけてのわずか50年あまりという短い期間に、製鉄・製鋼、造船、石炭産業において急速な産業化を達成し、西洋から非西洋へはじめて産業化の移転が成功したことを示しています。



端島炭坑(軍艦島)

速報!「五島神楽」が国の重要無形民俗文化財に

2016年(平成28)1月15日、国の文化審議会(宮田亮平会長)は、「五島神楽」など6件を国の重要無形民俗文化財に指定するよう馳浩文部科学相に答申しました。

「五島神楽」は福江・岐宿・玉之浦・富江・有川・上五島・宇久の七つの神楽の総称で、2002年にはその一部が国選択無形民俗文化財に登録されていたものです。400年以上の歴史をもち、各種の採物舞や巫女舞だけでなく「入鹿高松」のように他に類例のない演目など豊富で特色のある内容を持っています。

3月2日に正式に指定され、「長崎くんちの奉納踊り」などを入れて県内7件目となりました。



画像提供:高村昌治氏

「梅屋庄吉・読書感想文コンクール」

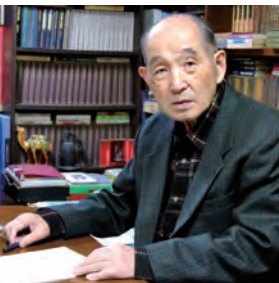
2015年(平成27)11月21日、長崎市の旧香港上海銀行長崎支店記念館で『長崎の偉人 梅屋庄吉』の読書感想文コンクールの受賞者の表彰式が行われました。

このコンクールは、一昨年県が発行した児童書を通じて孫文を物心両面で支援した長崎出身の実業家・梅屋庄吉の功績等を広く若い世代に伝えるために実施され、県内から小学校高学年24点・中学生61点の応募があり、それぞれ10名が各賞を受賞されました。なお、最優秀賞は島原市立第一小6年の本多真人君と西海市立大崎中3年の林美有希さんが受賞されました。



永留久恵氏の功績

2015年(平成27)4月17日、対馬を代表する歴史研究者であり対馬市初の名誉市民であった永留久恵氏が亡くなりました。享年94歳。永留氏は1920年(大正9)、対馬市(旧上県町)生まれ。長崎師範学校を卒業後、太平洋戦争に従軍し、真珠湾攻撃やミッドウェー海戦を経験。復員後、小・中学校の教員として郷里・対馬の教育にたずさわり、鶏知中学校校長を最後に退職されました。校務の傍ら、『新対馬島誌』(1964年)や島内の各町誌の編集、そして県立対馬歴史民俗資料館の建設に携わり、宗家文書等の各種調査にも貢献されました。1990年には「芳洲会」を結成し、日韓友好と学術・文化振興に尽力。『対馬国志』(2009年)で日本自費出版文化賞大賞を受賞されました。



画像提供:永留史彦氏

日本遺産認定と情報発信事業始動！

2015年(平成27)6月29日に、日本遺産第1号として認定された「国境の島 老岐・対馬・五島～古代からの架け橋～」をはじめとする日本遺産の認定式、そして記念フォーラムなどが東京国立博物館で開催されました。あわせて、18件のストーリーや地域を担う関係者が集い、記念フォーラムが開催され、情報交換などが行われました。

また海外でも、11月にパリ日本文化会館を会場として、18件の日本遺産を象徴する「もの」やポスターなどの展示を行い、フランスの方々に日本各地の歴史や文化の魅力を体感いただきました。



下村文部科学大臣から中村知事へ第1号の認定書が交付



老岐焼酎も紹介した展示ブース
(東京国立博物館平成館ラウンジ)



パリ日本文化会館では、五島のバラモン風、老岐の鬼風などを展示 画像提供:文化庁



「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」展をパリ、ローマで開催



パリ日本文化会館 ©宮本敏明



カンチェレリア宮(ローマ) ©芦澤英子

「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は、キリスト教の伝来から450年もの歴史を物語る、長崎県が世界に誇る文化遺産です。その遺産の価値を、ヨーロッパをはじめ世界各国の方により深く理解してもらうため、パリとローマにおいてパネルや関連資産(複製を含む。)による展覧会を開催しました。

パリ、ローマ共にたくさんの方々にご来館いただき、「はじめてこのような歴史を知り非常に感動した。」「他の都市でも是非開催してほしい。」「将来、長崎を訪れてみたい。」といった、好意的なご意見をたくさんいただきました。私達が考える以上に日本におけるキリスト教の歴史は知られていませんでしたが、この遺産が物語る世界的にも稀有なストーリーは、世界中の人々へ感動を与えうるものであることを実感できたとともに、本遺産を通じて長崎へ興味を持っていただき、長崎を訪れたいと思っていただく十分な動機付けとなり得ることがわかった展覧会となりました。

また、平成28年夏に世界文化遺産への登録を目指していた「長崎の教会群」は、イコモスからの中間報告を受け一旦推薦を取り下げることとなりましたが、その世界遺産としての潜在的な価値は認められていますので、今後も早期登録を目指して全力で取り組んでいきます。

会場	所在地	会期	総入館者数
パリ日本文化会館	パリ	H27.10.20～31	4,876人
カンチェレリア宮	ローマ	H27.11.23～29	726人